薬学部だより

Faculty of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokushima

徳島大学薬学部
February 2011
Vol. 7

ご　挨　拶

「未来を生きる若者よ、志をもたれよ。志は、どんな時も君たちを夢に導く道しるべになる」 －映画「こころざし」長井博士の言葉より－

徳島大学薬学部長

高 石 喜 久

Yoshihisa Takaishi

新しい薬学教育制度が開始され、５年が過ぎようとしています。私達薬学部の教育改革の道筋、目指すもの、そしてその課題などに付きましては「薬学部だより」３・５号に詳しく書きました。本号ではその後の歩みについて述べたいと思います。

2009年９月から３ヶ月余り、６年制教育の事前学習が薬学部教員全員参加により実施され、翌年１月に CBT 本試験、２月に OSCE 本試験が実施されました。これらは全て薬学部に取りましては初めてのことで大変でしたが、教職員・学生の全面的な協力の下、無事終了したことを嬉しく思っています。2010年３月末には薬学教育評価機構へ「自己評価21」を提出すると共にホームページに公開しました。これは薬学関連機関が自主的に設立した機構で薬学教育の品質を社会に保証することを目的にしています。この評価書作成には本学部の自己点検評価委員会・事務が中心となり膨大な資料を整理し作成しました。関係委員並びに事務の皆様に深く感謝申し上げます。

2010年３月末には初めての創製薬科学科卒業生40名を社会に送り出しました。卒業生の皆様の殆どは大学院へ進学されております。そして４月改組された大学院薬科学教育部創薬科学専攻に37名の大学院生を迎え新しい大学院教育がスタートしました。５月からは薬学科の病院・薬局実務実習（各2.5ヶ月）が開始され12月に無事終了しました。この実務実習は日本の薬学教育が開始されて以来の大改革でこの準備には大変な労力を必要としました。実習先の徳島大学附属病院特に薬剤部、並びに薬局の皆様の全面的なご理解とご協力を得て進めることが出来ました。学部内では教職員・事務の全面的な支援体制の下、特に、教務委員会、実務実習室、臨床薬学講座３分野が積極的に関与して頂きました。これら皆様方のご協力なしには実務実習は進行しませんでした、関係各位に深く感謝申し上げます。実務実習を終えた学生さんの目の色が変わっているのを拝見し、私自身現場での教育の重要さをつくづく感じています。

2010年７月には念願の長井長義先生の映画製作発表会が長井記念ホールで華々しく開催されました。当日は長井役の西村和彦さん、父親役の大杉蓮さん、妹役の大塚ちひろさん、山田監督、脚本家の旺季さん、徳島県知事、香川学長、五十嵐理事などそうそうたる人々が舞台に立ち、マスコミもテレビ、新聞社、タウン誌など沢山の人々が参集して頂き無事終了することが出来ました。話題性も有りましたことから連日報道が続き、県民の皆様にも映画作りを知って頂き公開を楽しみにして頂いております。募金の方も団体を始め、個人の皆様からの寄付も多く、目標の１億円にほぼたどり着くところまで来ています。関係者の皆様に深く感謝致します。その後映画撮影が50余名余りのスタッフにより９月から開始され、東京近郊でのロケ、薬学部での玄関を含む徳島ロケを経て10月始めのドイツロケでほぼ終了し、今は編集段階です。12月に東京でオールラッシュ（映画の仕上がり前の試写会）があり、私も参加してきました。その感想は「映画はすごい・素晴らしい」の一言です。その後「タケカワユキヒデ音楽監督」の音入れ（大塚ちひろさんの挿入歌を含む）等が終われば完成です。2011年３月からの公開を楽しみにして頂きたいと思います。

2010年11月には医・歯・薬学部の臨床系研究室が同じ建物内で研究・教育を進めるため、薬学部からは臨床薬学講座３分野（医薬品情報学、医薬品機能生化学、医薬品病態生化学）が移転しました。薬学部に取りまして、より患者さんの近くで臨床研究・教育が出来ることに

長井映画薬学部ロケ

なり、**「顔の見える薬学を目指した」**成果を上げることが大いに期待されます。また、３分野移転後の跡地に関しましては模擬薬局等実習施設の移転、講義室・セミナー室の新設、研究室の狭隘解消のためセンター棟研究室の移転を進めておりまして、2011年３月末までには完成する予定です。また、薬学部玄関の改修予算も認められ、そこに長井博士の胸像を設置しイメージチエンジした玄関とする計画も進んでいます。

2010年12月にはソウル大学薬学部と徳島大学薬学部の学術交流20周年を記念した記念式典並びにシンポジウムが淡路島夢舞台で盛大に開催されました。韓国側から50名の教職員・院生、徳島大学から90名余りの教職員、大学院生、招待者が参加し20年に渡る友好関係を確認すると共に未来へ向けた交流を確認した有意義な会でした。特に大学院生に取りましては英語での発表など大変だったと思いますが良い勉強になったと思います。本シンポジウムは実行委員会の大髙教授を始め実行委員、事務の皆様（川瀬課長補佐、小西係長、宮川係長）には準備から大会運営まで非常にお世話になりました、深く感謝申し上げます。

さらに現在2012年４月に設置する大学院（３年制博士後期課程、４年制博士課程）の計画を進めています。これから文部科学省のヒヤリングを受ける段階です。これが終了しますとほぼ新しい薬学教育制度改革の道筋はつくと考えています。

私自身薬学部の旗振りを任されて４年が過ぎようとしています。この間種々の事柄がありました。大学の置かれている立場を理解し、学部の教育・研究の発展並びに学生・院生のことを考えこれまで邁進（時には走りすぎ）して参りましたが、振り返れば薬学部の持つ伝統「教職員学生が一体となって学部の発展を進めて行く」の流れの中を流れて行っただけだとつくづく思っています。ご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

最後になりますが、学生・院生の皆様にメッセージをお送りします。本原稿の冒頭に長井博士の言葉を書きました。そのことについて少し書きます。

志という言葉ですが、上の士は進み行く足の形が変形したもので、下は心ですから、「志は心が目標を目指して歩み行く」を表しています。皆さん、志を持っていますか。今皆さんは大きな志（大志）とは言わないまでも、どういう仕事をやりたいか、どういう人生を送りたいという「目標」は持っていると思います。１つのデータがあります。1953年アメリカ東部の名門校、エール大学の調査です。卒業生に聞きました。「あなたは目標を設定していますか」、「その目標を書き留めていますか」「目標達成の計画はありますか」と質問したそうです。全ての質問にイエスと答えた卒業生は３％だったそうです。それから20年後卒業生を追跡調査したところ、驚くべきことが分かりました。この年に卒業した学生の20年後の総資産のうち、なんと97％は、この３％の卒業生たちが握っていたそうです。お金もうけだけが人生ではありませんが、色んな**目標を持ち、それを書き止め、目標達成のための計画**を持っていれば、志が叶います。長井先生の言葉を噛み締め実行されることを望みます。「夢は叶う」と私自身もつくづく人生を振り返りそう思う今日この頃です。

学術国際交流

ソウル大学校薬学大学－徳島大学薬学部学術交流協定20周年記念シンポジウム

機能分子合成薬学分野　教授

大髙　章

Akira Otaka

昨年12月22日から12月24日にかけ、国立ソウル大学校薬学大学と徳島大学薬学部間の学術交流協定締結20年を記念するシンポジウムが淡路夢舞台国際会議場で開催されました。ソウル大学側から50名（教員23名、学生27名）、徳島大学側からは香川学長、五十嵐副学長、福井国際センター長をはじめとする93名、そして来賓、外部講師の先生５名を加えた参加者総数148名の会となりました。この学術交流協定は平成２年に締結されたものであり、これ以降、教員による相互訪問と学術講演を基本として、両校の友好関係を深めて参りました。その間、10周年記念シンポジウムが韓国済州島で開催されたことは皆様の記憶に新しいことと存じます。今回は、高石学部長を実行委員長とし、その下に教員５名（伊藤教授、篠原教授、石田准教授、柏田准教授、大髙）からなる実行委員会を組織し、シンポジウムの企画、運営を行って参りました。まずは、徳島大学薬学部に関係する多くの皆様方のご協力により、無事シンポジウムを終えることが出来ましたことをご報告申し上げます。

本シンポジウム開催が具体化して参りましたのは、一昨年末のことと記憶しています。平成21年３月に石田准教授とともに大髙がソウル大学を訪問させていただいたことを縁とし、私、大髙が中心となり、高石学部長の指揮下、20周年

両大学間の懇談会・香川学長を交えて

学術国際交流

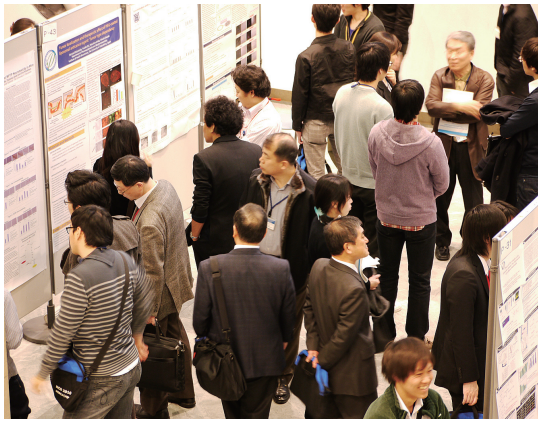
高石学部長による基調講演

淡路夢舞台国際会議場にて記念撮影

記念シンポジウムを企画させて頂く運びとなりました。素案をまとめ、平成22年６月学術交流協定更新時に伊藤教授、柏田准教授、川瀬課長補佐とともに再度ソウル大学を訪問し、具体案の確定作業に入りました。この際、ソウル大学から大学院生による口頭発表の機会を是非設けてほしいとのご要望を頂きました。現在、国立ソウル大学校薬学大学では、国際舞台で通用するプレゼンテーション能力を持つ学生の育成を目指し、英語によるプレゼンテーション教育に力を入れているようです。これは、ソウル大学が京都大学、大阪大学と共催で大学院生発表会を企画していることから伺い知ることが出来ます。そこで、シンポジウムは、両校学部長による基調講演、教員による口頭発表、大学院生による口頭発表、ポスター発表、さらに薬学教育６年制に関するミニシンポジウムから構成することと致しました。薬学教育に関するミニシンポジウムは、韓国薬学教育が今年９月より６年制に移行することを踏まえ、教育問題に関する意見交換を主目的とし、土屋教授に企画して頂きました。最も、危惧したのはやはり大学院生による口頭発表会でした。徳島大学薬学部では大学院生による英語発表会の企画は今回が初めてです。しかし、心配は杞憂に終わりました。学生諸君そして指導教員の努力が実り、ソウル大学生に負けぬプレゼンテーションが出来たのではないかと考えています。ソウル大学との学術交流を基盤とした大学院生英語発表会、これも薬学部における英語教育の一環として検討の価値あるものではないかと思います。

学術事業以外に、初日には20周年記念パーティー、２日目にはFarewellパーティーを企画致しました。記念パーティーは、本交流事業の意義をご理解いただき、永年に渡り絶え間ぬご援助を頂きました株式会社大塚製薬工場への感謝状贈呈をもって開始致しました。酒杯を交えることで、両校の交流がよりスムーズに進んだものと確信いたしております。また、最終日にはソウル大学からの参加者を対象に、奈良観光を実施致しました。唐招提寺、薬師寺、東大寺を巡る小旅行です。京都を訪れた方は多いですが、ほとんどの方は初めての奈良で、シルクロードから朝鮮半島を経た文化の終着点、それがここ奈良であるということに、自国文化との比較で、大変興味を示して下さいました。最後に皆さんを関西国際空港にお送りし、20周年記念シンポジウムを無事終了することが出来ました。

今まで、本交流事業は教員間の交流が中心となっていました。今回、大学院生口頭発表会を設けることで学生間交流の礎を築くことができたと思っております。親密な学生間交流構築を一つの方向性とした教育プログラムの策定も今後必要ではないでしょうか。最後になりますが、今回の記念シンポジウムを成功裏に終えることが出来ましたのは、大学本部からのご援助、また薬学部に所属する皆様の多大なご協力、特に事務方、川瀬課長補佐、小西係長、宮川係長、武市さん、久米さんのサポートのお蔭であることを申し添えたいと存じます。



ポスターセッションを行う両大学の教員・学生

両大学の学生・Farewell Party にて

実務実習

6年制薬学科長期実務実習の幕開け

臨床薬学実務教育室　准教授

東　　満美

Mami Azuma

今年度、薬剤師養成のための６年制教育は開始されて５年目を迎え、医療施設での初めての長期実務実習が開始された。６年制実務実習の主な特徴として、①　全員が病院・薬局両方で実習を行うこと（本学では以前からそうであったが）、②　期間が11週間と長期になること、③　実務実習モデル・コアカリキュラムに従い実施されること、④　指導薬剤師は「認定実務実習指導薬剤師」の資格をもつこと、などが挙げられる。また、参加・実践型実習の条件である学生の資質確認のため、前年度より共用試験（OSCE、CBT）が実施され、実習に先立ち全員これに合格することが一つの条件になっていることも特記すべきだろう。徳島大学薬学部薬学科５年生41名は、２期（第Ⅰ期：５月17日(月)～７月30日(金)、第Ⅱ期：９月６日(月)～11月19日(金)）に分かれ、病院と薬局に各11週間配属された。病院実習施設は全員本学蔵本キャンパス内の徳島大学病院であるが、薬局実習は徳島市内17の保険薬局にお世話になることになった。

徳島大学病院では、１期４グループ（１グループ約５名）で実習を実施した。病院薬剤部の指導薬剤師だけでなく、薬学部からも医学部臨床研究棟に位置する臨床薬学講座や実務経験のある臨床薬学実務教育室の教員が出て実習指導にあたった。分担は、病院薬剤部担当６週間、薬学部担当４週間、導入とまとめは両者合同の担当で１週間、計11週間とした。最も長い時間をかけたのは病棟実習（４週間）で、各病棟を担当する薬剤師に学生が１名ずつ付き病棟薬剤師の業務を見学・実践させていただいた。参加・実践型実習を目指すため学生は一つの病棟のみを経験する体制であるが、病棟実習最終日には学生の発表会を実施して全員ですべての病棟の情報を共有できるようにしている。

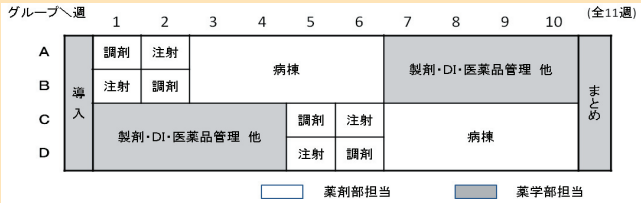
薬局実習では、１期１薬局につき１～２名の学生が同時に実習することとなった。内容は保険調剤や服薬指導に止まらず、OTC 薬・健康食品を含むセルフメディケーション支援、在宅医療・福祉、学校薬剤師業務を含む地域保健、リスクマネージメントなど多岐に渡っている。実習薬局の業務形態により日常業務の内容に相違はあるが、モデル・コアカリキュラムに基づく実習になったことで実習内容の全国的統一が図られている。学生はコアカリキュラムの目標（SBOs）到達に向けて研鑽し、薬局の指導薬剤師がその到達を確認する。実習終了には全 SBOs 達成が条件となる。大学の指導体制として、学生の所属研究室の担当教員が期間中３回は薬局を訪問、また２週間に１度は学生に帰校させて実習報告を受け、実習状況の把握と指導を行っている。それとは別に、実務教育室教員も種々の方法で指導薬剤師と密に連絡を取り、実務経験を生かして実習施設と大学との連携、学生の相談応需等に努めている。

病院での調剤実習

病棟実習発表会

今年度は実習終了２週間後の平成22年12月４日(土）に、薬学部１階スタジオプラザで実習成果ポスター発表会を開催した。当日は卒後教育公開講座と同時開催であったため、多くの卒業生や薬剤師にポスターの閲覧や学生とのディスカッションをしていただくことができた。優秀ポスターには学部長賞の授与も予定されている。

平成22年度の実務実習は、多くの関係者のご尽力の御陰で無事終了することができた。学生のアンケート結果では、実習期間の長さの感覚が終了時には短い方へとシフトしているなど、充実した実習期間を過ごせたことが伺えた。特に多忙な業務の中、実習生を受け入れて下さった実習施設や指導薬剤師の先生方には、心より感謝申し上げたい。これからも社会や時代の要請に応えることができるよう、実績と経験を積み重ねて上質の安定した本学独自の実務実習体制を構築できればと思っている。関係者の皆様方には今後とも引き続きご支援・ご協力をどうかよろしくお願いいたします。



病院実習スケジュール

実習成果発表会

実務実習を終えて

薬学科５年

高 安 宏 和

Hirokazu Takayasu

CBT や OSCE では、病に苦しむ患者さんはいない。しかし、現場には生活習慣や性格の異なる患者さんがいる。病棟および薬局実習ではこうした患者さんへの対応を介していかに実践的に知識を応用するかを学んだ。

薬局では、幅広い処方に対する調剤および服薬指導を経験した。そこでは全ての業務にスピードかつ正確性が要求される。患者さん一人一人に適した服薬指導を行なうため、必要な情報を短時間にかつ適切な問いかけで入手できる能力が必要となる。実習が進み薬局で多くの患者さんと接するうちに、知識は経験を重ねることで習得できるが知識だけでは患者さんに必要とされないと感じた。患者さんの信頼を得るには、薬剤師の存在価値を実感してもらわなければならない。そのために、日々、自分の課題を発見し自分で解決していく力を身に付けていきたい。

病棟実習では、小児科に配属された。生まれて初めて幼い赤ん坊を抱かせていただくという貴重な経験をしたが、最も印象に残ったのは小さな患児が病と闘いながら、力強く成長する姿を見れたことである。一方で、小児科で働くことの難しさも知った。患者さんが幼い子供であることが多いため服薬指導時間が患児の機嫌に大きく左右される。従って、いつ中断されるか分からず、重要性の高い情報から伝えなければならない。また、言葉の話せない患児においては、検査結果や患児の行動などの客観的情報に常に気を配り、取り組むべき仕事を取捨選択しなければならない。そのために、どんな時も患者さんの目線に立って行動できる人間になりたいと強く感じた。

６年制に移行して初めての長期実習であったが、現場で学んだことは本当に多かった。休日を返上し、いかなる状況においても安全かつ適切に医薬品を供給する薬剤師の姿を目にし、僕たちが向き合っているのは薬の書かれた処方箋ではなく、病を患う人間であると強く感じることができた。患者さんが抱える病気とその人生は一人として同じではない。だからこそ、患者さん本人にしか分からない痛みや苦しみに、医療人として寄り添っていくことがこれからの自分に最も必要であると感じた。「慣れ」は確かに業務を円滑にするが、初めて患者と向き合った時の緊張感を忘れずに医療に携わっていきたい。そして、大学で学んだ基礎学力と患者さんとの多くの実践経験を糧にして現場で必要とされる医療人になりたい。

薬学科５年

新 田 芳 久

Yoshihisa　Nitta

今回の実務実習を行うにあたって、薬剤師と患者さんとの関わり方について学ぶことを目標にしました。処方鑑査、調剤をはじめ、薬剤師が行う業務のひとつひとつが重要だということは４年までの講義で学習しましたが、今まで人と関わることが得意でなかった自分には、将来薬剤師となるために必要なコミュニケーション能力が不足していると考えたためです。

最近はかかりつけ薬局が普及してきていますが、今後は「かかりつけ薬剤師」が普及するべきであるということを学びました。「かかりつけ薬剤師」の普及には、患者さんとのコミュニケーションから生まれる「信頼関係」が重要となり、そのためにはコミュニケーションを円滑に進めていかなければなりません。

薬局や病院で働く薬剤師の先生方がどのように患者さんと接しているのかを見たとき、顔を知っている患者さんだけでなく、初めて来局・入院される患者さんに対しても自然な対応を取っていることにとても驚き、自分にできるかどうか不安になりました。薬局実習で、初めて患者さんを目の前にして初回アンケートをしたとき、緊張から声が小さくなってしまい、患者さんが聞き取りづらそうな顔をしていました。また、アンケート用紙に書かれている項目以外の患者さんの不安や心配などを聞くことができませんでした。この経験から、患者さんと上手にコミュニケーションを取るのはとても大変なことだと実感しました。

病院実習では、この経験を活かし、初回面談で聞き取りやすい声ではっきりしゃべること、患者さんの不安や心配などを聞くことを徹底してやっていきました。最初のうちは薬剤師の先生に助けて頂いてなんとかできる状態でしたが、回数を重ねていくうち、徐々に１人でできるようになりました。また、患者さんから質問して頂く回数も増え、少しですが信頼を得られたのではないかと感じました。

実務実習を経験して、薬剤師の業務はもちろんのことですが、患者さんのために働く薬剤師の仕事にとてもやりがいを感じました。将来働くときは今回の経験を生かして、患者さんから信頼される「かかりつけ薬剤師」になりたいと思います。約６ヶ月間で自分に足りないところや今後すべきことを見つめ直すことができ、理想の薬剤師像を考えることができた実務実習はとても有意義なものとなりました。

実務実習を終えて

薬学科５年

閏　真梨子

Mariko　Neya

薬局と病院での二ヵ月半ずつの実習を終えて思うのは、非常に濃く充実した時間であったということです。実際に現場で働く薬剤師の先生方や患者さんと接するという、貴重な経験をすることができました。

薬局では調剤をはじめ服薬指導など、さまざまな業務をさせていただきました。薬の規格を間違えたり、一包化する際に量を勘違いして分包してしまったりと、正確かつ迅速に調剤することの難しさを実感しました。初めて患者さんに薬の説明をしたときは、とても緊張しうまく言葉が出てきませんでした。次第に落ち着いてできるようになりましたが、何か言い忘れたり患者さんからの質問にとまどってしまうこともあり、薬剤師の先生にアドバイスをいただきながら日々学ぶことばかりでした。また、精神科の患者さんが多いこともあって、言葉の選び方には特に注意し、副作用について説明する時も詳しく言い過ぎないようにしているというお話から、患者さんに合わせた服薬指導の大切さを強く感じました。

病院実習の実習病棟は、薬局で精神科の患者さんと関わる機会が多かったこともあり、精神科を選びました。精神科病棟薬剤師の業務の中で印象的だったのは、患者さんとの面談です。会話やその表情から今日の体調や薬の服用状況、副作用の有無などを確認します。いざ行うと、会話がうまく続かなくて沈黙しまうこともありましたが、毎朝面談するうちに私のことを覚えてくれて笑顔でこちらに色々質問してくださる方もいました。そのときはとてもうれしく、薬剤師という仕事は人と人との関わり合いの上に成り立っていると改めて感じました。

患者さんが正しく安全に薬を使えるように、適切な情報を提供することは薬剤師の重要な役割の一つです。実習中、自分の知識不足を実感する場面が何度もあり、幅広い分野においてこれからもっと学ぶ必要があると感じました。そして、自分が思っていた以上に患者さんとよりよい信頼関係を築くことが大切であると、改めて気付くことができました。実際に服薬指導を行って、患者さん一人ひとりときちんと向き合い、その中で患者さんのちょっとした変化にも気付くことができるような薬剤師になりたいと思いました。そして、そのような薬剤師になるために、この実習中に学び感じたことをしっかり吸収し、これからも活かしていきたいです。

薬学科５年

永 井 浩 章

Hiroaki Nagai

今回、薬学部６年制教育の一期生として薬局、病院で各11週にも及ぶ長期実務実習を行い、その中で大学の講義だけでは学びきることのできない多くのことを感じ、得ることができました。

前期は徳島大学病院の近隣の薬局で実習を行いました。薬局実習で特に印象深かったのが服薬指導です。薬局ではカルテを見ることができないので、薬剤師は処方箋と患者さんとの会話から医師の処方意図を明らかにし、その処方が妥当であるかを判断する必要があります。そして患者さんとの会話の中で、医師には伝えていなかった体調や薬の悩み・不安についても話され、その結果、医師に連絡して処方変更につながったこともあり、薬剤師が患者を守っていることを感じました。

また、服薬指導を行う際は、ただ薬の説明を行うのではなく、患者さん一人ひとりに対して問題点、疑問点を会話の中で見出し、解決することが必要だと学ぶことができました。

後期では徳島大学病院で実習を行いました。病院薬剤師は薬局とは違い医師や他の医療スタッフとの連携が重要で、電子カルテや口頭での情報交換を行いながら治療に参加していました。

病院実習によって印象が大きく変わったのが持参薬調査でした。患者さんが入院されたときに持参した薬の用法・用量について確認することですが、実習を行う前までは、ただの聞き取り作業のようにかるく思っていました。しかし、現場の薬剤師は同時に、服薬方法に問題がないか、持参薬による副作用発現の有無について確認し、病院で処方された薬剤との相互作用も考えながら行っていました。特に「持参薬による副作用発現の有無」については、薬剤のことを知った上で患者さんと向き合わないと気づくことができないので薬剤師の凄さと、持参薬調査の重要性を学ぶことができました。

薬局・病院実習を行い実際の現場で働く薬剤師と接することで、薬剤師と医療についてより深く考えるきっかけとなりました。特に薬剤師は患者との会話を通じて信頼関係を築き、薬剤を中心とした考え方ではなく、患者を中心とした考え方を持って、薬学的視点から患者の治療を助け、副作用から患者さんを守ることができる仕事であることを実感することができました。

薬学部臨床薬学講座３分野の医学臨床Ｂ棟への移転

医薬品情報学分野　教授
山内あい子
Aiko Yamauchi

平成22年11月末、臨床薬学講座３分野、即ち、医薬品病態生化学分野（旧：微生物学講座）、医薬品機能生化学（旧：生化学講座）および医薬品情報学分野は、改修された医学臨床Ｂ棟（生命科学総合実験研究棟）５階への移転を無事完了しました（図１）。また、協力講座である臨床薬剤学分野（病院薬剤部）の研究室も同じフロアに入りました。

平成22年４月より部局化された徳島大学病院では、施設の再開発が進んでいます。昨年度新築された西病棟に第３病棟の患者が転出した後、旧第３病棟の建物が臨床系分野の集合する生命科学総合実験研究棟として改修されました。ここは医学臨床Ｂ棟とも呼ばれ、医学・歯学・薬学の各臨床系分野が連携して、大学病院を基盤とした総合医療教育及び生命科学研究拠点となることを目指します。この建物の１階には創立60周年記念事業として様々な最新機器が配備された総合研究支援センターが置かれ、２階以上に医学（２～８階）、歯学（２～４階）および薬学（５階）から臨床系19分野が入居しています。今後は、薬学部の教員も病院内に足場を置いて診療補助・研究・教育に携わることになり、薬剤師養成のみならず徳島大学の医療人育成にも寄与することが求められています。

医療技術の高度化、医療現場における薬剤師の役割の変化などを背景に、薬学部では、平成18年度より「臨床に係る実践的な能力を培うことを主たる目的とする」薬剤師養成のための６年制薬学教育がスタートしました。現在、初年度入学生は薬学科５年生となっており、今年度５月～11月には病院と薬局における長期実務実習が実施されたところです。この度、研究室が病院内に移転したことで、徳島大学病院にて実施する病院実務実習（11週間の実習を20人ずつ２回実施）でモデル・コアカリキュラムの約35％を担当する臨床薬学講座３分野の教員と、薬剤部薬剤師の先生方をはじめ診療科医師との連携もより円滑になるものと期待されます。

徳島大学薬学部は平成24年度に創立90周年を迎えますが、今回の移転は薬学部にとって大胆な試みの一つと言っても過言ではありません。本学の新しいシステムが総合医療教育の全国的なモデルケースとなるよう、臨床薬学講座一同力を合わせて新境地を開拓して参りたいと考えておりますので、一層のご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

医学臨床Ｂ棟　各階案内

階数	分　野　名
８階	呼吸器・膠原病内科学分野，腫瘍内科学分野 眼科学分野
７階	小児医学分野，腎臓内科学分野
６階	消化器・移植外科学分野，脳神経外科学分野
５階	医薬品機能生化学分野，臨床薬剤学分野 医薬品病態生化学分野，医薬品情報学分野
４階	循環器内科学分野，口腔内科学分野 口腔外科学分野
３階	麻酔・疼痛治療医学分野，歯科麻酔科学分野
２階	放射線科学分野，医療情報学分野 歯科放射線学分野
１階	総合研究支援センター　先端医療研究支援部門

図１．改修された医学臨床Ｂ棟（臨床薬学講座３分野と臨床薬剤学分野は５階に入居）

長井長義映像評伝

長井長義博士の「こころざし」

監督

山 田 和 広

Kazuhiro Yamada

「長井長義って知ってますか？徳島生まれで日本薬学会の会頭を務めた人です。徳島大学の恩人です」徳島大学と那賀町が主催する『地域再生塾』に臨時講師で呼ばれた時だった。徳島生まれである私は、名前すら知らない無学を恥じた。東京に戻り、長井長義が会頭を務めたという日本薬学会を訪ね、資料室に保存されている文献を当たった。感動した。それは、長井博士の業績もさることながら、縁に随い、信念に生きる、愚鈍なまでの誠実さで志を全うした生き方にだった。そして、その堂々とした生き方を今の若者に伝えたいと思った。そう考えたのは、実は私だけではなかった。

「長井長義資料委員会」が渋谷先生（当時副学長）と高石先生（学部長）によってつくられ、資料収集と研究、顕彰活動を続けていた。あらためて徳島大学を訪ねた私は、渋谷先生から長井博士の様々な業績、収集した資料について解説していただいた。そして高石先生からは、ぜひ長井博士の志を世に問いたいという熱い思いを聞かせていただいた。そんな中、ぜひ映像をつくろう！中身も何も決まっていないのに、なぜかそう思った。

プロデューサーにそんな思いを告げたところ、「地方発の知られざる偉人伝になるのではないか」と意気投合した。それが長井長義映像評伝「こころざし」のスタート、今から４年前のことだった。以来、渋谷先生のアドバイスをいただきながら長井博士の人物像を探っていくこととなった。しかし思いだけでは事は進まない。映像作りには費用がかかる。それも舞台は幕末から明治である。きちんとつくろうとすればするほど、費用は膨らむ。そこで製作委員会（現実行委員会）を立ち上げ、先生方にも加わっていただき、映像の方向性と資金調達の協議が始まった。そして長井家への挨拶、長井博士が長年会頭を務めた日本薬学会、教授として後進の指導に当たった東京大学への挨拶と協力要請、一歩ずつ映像化の動きは広がっていく。

「本当に実現するんだろうか？」長井博士の業績を世に問いたいという思いは、参画していただいた関係者共通の思いだったが、製作資金の目途がなかなか立たない。そんな時「お前が弱気になってどうする！」叱咤激励してくれる友人がいた。この話に最初から加わって裏方として支えてくれていた高田君（当時課長補佐）だった。長井博士の映像化は実現したいのではなく、実現しなくてはいけない。私の腹は決まった。その思いは、先生方も、関係者も同じだった。

そんな時支援をお願いしていた企業から、具体的な話が届く。そして多くの人たちの支援によってつくるという形にしてほしいという。そこで寄付の受け入れ体制としてメセナ協議会の認定を受け、支援の輪は次第に広がり始める。みんな地道な協力要請のおかげだった。そしてポケットマネーから寄付してくれる関係者も現れる。

プロデューサーからゴーサインが出、いよいよ製作体制を組むことになった。長井評伝をどのように面白く見せるか？製作プロデューサーに数多くのドラマを手掛けてきた敏腕プロデューサーが、脚本家に徳島出身の新進気鋭の女性ライターが起用された。そして長井役に父親が薬剤師だったという西村和彦、父親役に大杉漣、妹役に大塚ちひろ、と多くの徳島ゆかりの人たちが参加してくれることになった。

「単なる偉人伝には終わらせたくない」そう考えていたのは私だけではない。プロデューサー、脚本家も同じだった。長井の人物像、医師となることを期待する父親と舎密（化学）を極めたい息子との葛藤、そして誠実に生きようとする長井を支えてくれる人びとの役割、ことに兄を思い、時には背中を押してくれる「妹の力」（柳田國男）をどう描くか、脚本は８稿を重ねた。

「父親との葛藤は……のように表現した方がいいのでは」「この……という科白は後に回した方がいいと思う」37～8℃もあろうかという９月の残暑の中、撮影現場も暑かった。映画撮影は脚本通りに進むものではない。俳優も人間、役づくりをする中で脚本と格闘し、スタッフとも意見をたたかわせる。それが２ヵ月続いた。実現のために粘り強く活動を続けてくださった関係者の思い、スタッフ、キャストの思い、そのトータルが、この春完成する２時間弱の長井長義映像評伝「こころざし」～舎密を愛した男～に込められている。

公開を迎えて、長井博士の縁に随い、信に生きた生き方をあらためて思う。その生きざまを、長井博士が生まれたこの徳島から、全国の若い世代の人たちに届けたい。この映像評伝を各地で上映するために、今一度みなさんのご支援を賜ることができればと切に願う。

徳島城公園内でのロケ風景

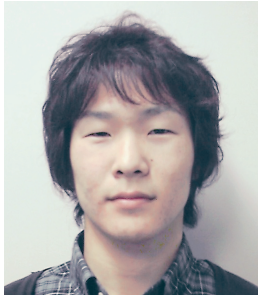
＜お問い合わせ先＞

徳島大学長井長義映像評伝実行委員会
事務局　www.nagai-nagayoshi.jp

こころざし～舎密を愛した男～　山田組　徳島ロケ完成記念

薬学生の活躍

３年間の経験と感謝



創製薬科学科３年

原 田 一 樹

Kazuki Harada

大学に入学し、どのような部活に入ろうかと期待に胸を膨らませていたとき、一番引きつけられたのが医歯薬学部剣道部でした。小学校の時から剣道をしていたということもありましたが、その縦のつながりの強さ、部活中や飲み会での雰囲気のよさ、そして何より学部の壁を越えたつながりなどが、「この部に入って大学生活を充実させよう。」と思わせてくれました。

そんな剣道部に入部して３年目、熱心に取り組んだ稽古が実を結び、夏に行われた２大大会で結果を残すことができました。医学科を除く医療系学部で行われる西日本コメディカル学生剣道大会の個人戦で準優勝、団体戦で優勝、全日本薬学生剣道大会の団体戦で準優勝という歴代最高の結果です。これらの結果を出すことができた時、充実した３年間が形となって表れた気がして、言葉にならない思いでした。そして同時に、このような素晴らしい結果を共に掴んだ先輩、同期、後輩への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

この３年間における剣道部での活動は、本当に中身の濃いものでした。チームがひとつになって優勝という一点を目指して奮闘した多くの大会。自分の技を磨き、理想に少しでも近づけるように試行錯誤しながら行った稽古。先生、先輩、時には他大学の方とお酒を交えて大いに盛り上がった飲み会。どれも一つ一つ忘れることのできない大切な思い出です。

そして剣道部は自分を成長させてくれた素晴らしい環境でもありました。剣道という競技は、力や技を駆使して相手から一本をとるというものだけではありません。“剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。”という言葉からもわかるように、剣道を通じて身体も心も鍛えられます。この３年間で、自分で言うのも何ですが少しだけ人間的にも成長できたように思えます。

このようにこの部は多くのものを与えてくれました。引退を迎え、研究室も忙しくなってきてなかなか部活に顔を出すことができませんが、自分が経験してきたことを少しでも多く後輩たちに受け継いでいけたら良いなと考えています。

最後になりましたが、部活動を行う上で多大なご支援をしてくださったOBの先生方を始め、共に稽古を積んだ部員のみなさん、そして部活を通じて関わった全ての方々に、この場をお借りして深くお礼を申し上げます。

訃　　報

荒木勉教授のご逝去に寄せて～ Goodbye Boss!!

荒木　勉　教授

神経病態解析学分野の荒木勉教授は、2010年11月１日に原発不明ガン骨転移のため59歳でご逝去されました。同年９月に腰痛を訴えられ入院されてから２ヶ月も経たずに…教室員一同激しい衝撃を受けました。荒木教授は東北大学薬学部ご出身で、東京田辺製薬（当時）ご勤務時代から神経変性疾患の病態機構とその治療薬開発に関わる基礎研究に邁進され、母校東北大学薬学部の助教授を経て2003年７月に本学ご着任以降も、MPTP毒性等によるパーキンソン病モデルマウスの病態解析および薬効評価と、MCAO閉塞ラットモデルによる一過性脳虚血の病態解析を中心として、精力的に研究を展開されていました。またその優しいお人柄は多くの学生に慕われ、特に学生愛とでも呼ぶべき「出来るだけ誉めて育てる」教育法と、小さなテーマでも学生に積極的に論文発表させる姿勢は、筆者にとっても大いに教育的でした。筆者は2009年12月に本学に着任し、この１年足らずの間に、教室のボスであり、OSCEの委員長でもあり、動物飼育室長でもあった荒木教授と文字通り目が回るような日々を過ごしていましたが、もっともっと沢山一緒に仕事をして、色々な話をして、酒食を共にして、研究の細かな部分まで熱く執拗に議論したかったです。荒木教授は *in vivo* での解析に長けておられ、加えて筆者らと共に *in vitro* の解析系も積極的に導入して、より研究を充実させ、その質を向上させようと努力されていた最中にこのような出来事が起きてしまい、心から悲しく残念に思います。実は荒木教授逝去の５日前に、荒木教授を徳島大学に紹介された東北大学薬学部の中畑則道教授が、やはり59歳で逝去されました。お二人で揃って何も言わず旅立たれるなんて、関係者一同言葉もありません。でもきっと彼方でお二人はまた研究の話で盛り上がっておられるのでしょうか…残された私たちは先生が目指しておられたところをしっかりと見据え、よき伝統は受け継ぎ、これまで以上に教室の研究活動を盛り上げるべく努力するのみです。荒木勉先生、徳島での７年余り、本当にお疲れ様でした。私たちは決して先生のことを忘れないでしょう。どうもありがとうございました。そして永遠にGoodbye Boss!!

執　筆：神経病態解析学分野　准教授
笠 原 二 郎

新任教員紹介

医薬品情報学分野　准教授
佐 藤 陽 一
Sato Youichi

平成22年５月１日付けで、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部医薬品情報学分野の准教授に着任致しました。私は本学薬学部薬学科を卒業後、医薬品の原薬メーカーであるアルプス薬品工業株式会社に入社しましたが、入社後すぐに本学微生物薬品科学教室（樋口富彦教授）において委託研究員並びに共同研究者として11年間、微生物の研究に従事して参りました。その間、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）に対する抗菌薬の開発並びにその作用機作の解明に関する研究を行って参りました。その後、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部分子予防医学分野（現；人類遺伝学分野、中堀豊教授）においてヒトの遺伝医学･遺伝疫学に関する研究に従事し、日本人におけるＹ染色体の多型解析や、ヒト性分化の分子メカニズムの解明並びにヒトの臨床検体を用いた肥満関連因子の探索、糖尿病モデルラットを用いた糖尿病発症と DPP4（dipeptidyl peptidase Ⅳ）との関連性について研究を行って参りました。今後は、これまでの多方面にわたる経験を生かし、医薬品の有効性・安全性情報を対象に EBM（evidence-based medicine）を実践し、医薬品適正使用と育薬の推進に有益な情報を提供することができるような薬剤疫学研究を実施すると共に、大学病院における診療支援業務を通じて得られる医薬品情報を、疫学や遺伝医学の観点から解析・評価し、それらを臨床の場に反映できるような教育・研究を精力的に行いたいと考えております。また、今年度から始まった長期実務実習等の実務教育にも全力を尽くして取り組み、臨床薬剤師育成のために微力ながら貢献させて頂きたいと存じます。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

薬学部関連ニュース

学会賞等受賞

■優秀ポスター賞
受賞者所属・氏名：薬学部薬学科医薬品機能生化学４年
藤井　聖子
受賞年月日：平成22年９月11日
表彰団体名：次世代を担う創薬・医療薬理シンポジウム2010
受賞内容（課題名）：Angiotensin II 誘発血管リモデリングに対する nitrosonifedipine の抑制効果

■ SAR Presentation Award ノミネート賞
受賞者所属・氏名：大学院薬科学教育部創薬科学専攻創薬理論化学
宗井　陽平（M2）
受賞年月日：平成22年10月31日
表彰団体名：社団法人 日本薬学会 構造活性相関部会
受賞内容（課題名）：分子科学計算に基づくベンゼンスルホンアミド誘導体の炭酸脱水酵素阻害機構解析と相関解析に関する研究

■日本薬学会中国四国支部奨励賞
受賞者所属・氏名：大学院 HBS 研究部医薬品機能生化学分野
助教　石澤　啓介
受賞年月日：平成22年11月６日
表彰団体名：日本薬学会中国四国支部
受賞内容（課題名）：腎・心血管障害における細胞内分子機構解明とその治療法の開発

■若手優秀研究発表賞
受賞者所属・氏名：大学院薬科学教育部創薬科学専攻薬品分析学
上村　剛史（M2）
受賞年月日：平成22年10月７日
表彰団体名：日本無機リン化学会
受賞内容（課題名）：振幅変調フロー分析法による微量リン酸イオンの定量

■ SAR Presentation Award（第38回構造活性相関シンポジウム）
受賞者所属・氏名：大学院薬科学教育部創薬科学専攻創薬理論化学
比多岡　清司（D1）
受賞年月日：平成22年10月31日
表彰団体名：社団法人 日本薬学会 構造活性相関部会
受賞内容（課題名）：インフルエンザノイラミニダーゼ - シアル酸誘導体複合体相互作用の非経験的フラグメント分子軌道法計算に基づく相関解析

■ Poster Award
受賞者所属・氏名：大学院薬科学教育部創薬科学専攻機能分子合成薬学
小倉　圭司（M1）
受賞年月日：平成22年12月９日
表彰団体名：5th International Peptide Symposium
受賞内容（課題名）：Synthesis of nonhydrolyzable AMPylated amino acid analogues for uncovering the physiological role of AMPylation

編集後記

長井長義先生の映画「こころざし」もクランクアップを迎えました。卒業生を送り出し、そして新入生を迎えようとする春３月の公開となります。「昨今の日本社会はどうも暗い話が多くて…」と皆様感じられておられるでしょう。こんな時代であるからこそ、「こころざし」を胸に前進、それが必要ではないでしょうか。「こころざし」を持てる特色ある教育・研究環境“徳島方式”の確立に向け、薬学部構成員が邁進するのも一案かと、学部長先生の巻頭言を拝読し、思った次第です。

（薬学部広報委員長　大髙　章）

発　　行：徳島大学薬学部
編　　集：薬学部広報委員会
広報委員：大髙　章、福井裕行、植野　哲、吉田達貞

URL：http://www.ph.tokushima-u.ac.jp/
〒770-8505　徳島市庄町１丁目78－1
徳島大学医学・歯学・薬学部等事務部総務課第三総務係
E-mail：isysoumu3k@jim.tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募下さいますよう御願いします。次回の発行は、平成23年の６月を予定しております。なお、広告を広く募集しております。